

小學新撰修身書

安原時太郎
平井義直編纂

二

176
2
50

大日本教育會館			
一	四	五	一
一	五	架	八
册	號		函

函一第

頁十一

K110.1
181
2

小 新撰脩身書

此卷ハ初等科第二年前期生徒ニ授ク
ル爲ニモテ主トシテ日常父母ニ事ヘ兄弟ニ
交ハル等ノ則テ教ヘ孝弟ノ道ヲ知ラシ
ム

小
新撰脩身書卷二

安原時太郎 閱

平井義直 編纂

第一章

父母の恩
きはまじりな

たこと
天地にひと

東
書

父母なくんば 家人ぞ我
あらん 其恩 海よわも
ふかく 山よるも 高
し 海山は 限りある
父母の めぐみは 限り
なし

大和俗訓

○わかき時ハ 我も人え
父母の恩を 思はず
力を盡さばして 不孝
を行ひ 父母終りて 後
悔はれど 益なし 是一
生の 限りなき 恨みな

り 同上

○父母に對して是の色を
やまらげ 氣をくだし

温和を主として つかふ

家道訓

○父母こきを愛されば

よろこんで 忘きすこ

れを惡めば 懼れて 怨

むことあり 過ちあきと

曾子

諫めず 逆とす

○父母長上 教誡するこ

とあらば 首をたきて

これを聴く
づーみど
里小議論を
なからば 朱子
○孝子の老
を養ふや



其心を 樂ましめ 其志
にたがはず 其耳目を
樂ほしめ 其寢處を安ん
ど 其飲食をもつて こ
を忠養 曾子
○孔子曰く 今の孝ハ

是能く 養ふことさいふ
犬馬小至るまで みか
よく 養ふとあり 敬
せむ人バ 何をあけ
別たんや 論語

○出ると知ハ 必告げ

及まば 必面てま 遊ぶ
とこ路 必常あり 習ふ
とまろ 必業阿里 礼記

○父母の愛さる所ハ こ
まを愛し 父母に敬する
所ハ 亦礼を敬し 犬

馬小至るまで 盡く志の

里 況や人に於くをや 礼記

○人乃子たる者ハ 聲な

きよ聴き 形お起小視る

高きよ登らず 深起小

臨まざ 苟くも 嘗らば

苟く之 笑ハず 同上

○孔子曰く 身體髮膚

之を父母に受く 敢て毀

む 傷らざむハ 孝乃始

めあり 身を立く 道を

行ひ 名を後世り揚げ

小行集卷之三 孝之三

以く父母を顯すハ 孝の

終あり 孝經

○孔子曰く 其親を愛せ

ざして 他人を愛するも

の之を悖徳といふ 其

親を敬をばして 他人を

敬するとは 之を悖禮と

いふ 同上

○又曰く 親を愛するも

のハ 敢て人を惡まざる

親を敬するも 敢て

人を慢るば 同上

○夫孝ハ 親小事ふるに
始まり 君に事ふる
中し 身を立つるふ

終る 同上

○父母いませば 遠く遊
ばず 遊ぶこと 必方あ

りよハ 既に告げて 東にゆ
くといつど 更り西に

適らざるか如し 學的

○父母に孝順し 長上を
尊敬するハ 百行の首
萬善の原なり 人よく此

道を盡しうきは 天地鬼
神之をこすも 親戚隣
里之をたも人す

齊家宝要

○我からたハ 父母の體
を分て 賜ハリーも能か
まハ 髮一すぐえ あた

になすまぐき理あり 父子訓

○農工商いづきも 其所
作とよく勤め 急らば
財穀を貯へむざと費さ
む。身もち心たて よく
慎み 公儀を畏ましく 法

度よそむらさず 我身妻子
 のことをば 第二とし
 父母の衣服食物を 第一
 小思ひ 心力を盡して
 及ばぬまことをも 調へて
 よろこばるゝやうに

もてかゝ
 よく養ふる
 庶人の孝
 行なり 翁問答
 ○天地父母
 ハ我生れ



一 本ふして 我身の よ
つて来さる初あり 忘る
べらば 天地の恩を
知らずして 仁ふそむき
父母の恩を 思ふべし
孝を行はざるハ 我

身の生れ来さる 本初を
忘さるなり 人と生れ
たる かむかゝといふべ
し 我人の耻く 畏るる
まこと 亦さより 大か
るハかゝ同上

○一言の偽りも 不孝か
まゝして不義無道を
身に行ひ 死まづき處小
て死をば 死ぬまづき
ところろろて 犬志にをふ
— たるまづき物をむ

さぼり やるべき物を
とらずして 飢寒小及む
かどするハ 皆以てのほ
ろ 大なる不孝あり 心
にかけて 慎み守るべき
ことあり 同上

孝行集巻之四 孝行集巻之四 孝行集巻之四

第二章

○兄弟ハ 同胞の親み
父母に次ぎたる 天倫か
三親の内 父子夫婦
よりを 交ハリ久しきハ
兄弟か 其久しきを

樂むべし 兄ハ弟に

愛ふらく 弟ハ兄小 敬

を盡さべし

初學訓

○兄弟ハ 同根より出た
る 數幹の如く 數幹よ
り出たる 數枝のごとく

又氣の連ること 宛と

十指の如くなまじバ 相和

相愛せざんば ある

べからば 勸懲雜話

○夫人民ありて後 夫婦

あり 夫婦阿あてのち

兄弟あり 一家乃親 此

三川のここれよあ以往

九族に至るまゝ 皆三

親に本づく 故小人倫に

おいと 重しとす 顔氏家訓

○兄弟ハ 形をわかち

氣をつらぬる 人あり
其幼おるに當りては 父
母左右にむさげ 食する
とたハ 案を同ふし 衣
るときハ 服を傳へ 學
ぶときハ 業を連福 遊

ふときも 方を共ふす
悖亂の人 ありといふと
も 相愛せざることを能ハ
す 同上

○弟ハ悌をもつと 兄ハ
法かふる道とほ 悌ハ

敬ひ順ふ徳あり 他人の
年老ひ 位高きに 法か
ふも 同ドことハ有な
り 他人ふても 老いた
るを敬ふも 道理能當然
あり 由して 親乃身を

わきて 我に先だちて
生れたる兄を 敬ひ順ふ
べきこと 勿論なり

翁問答

○兄弟門墻の内に 忿り
せめぐといへとを 外能
侮り あるふ至りてハ

力を同ふして 心體をふ
せぐ 大學衍義

小學新撰脩身書卷二終

明治十五年五月九日出版版權御願
同十五年五月三十日版權免許
同 年六月 刻成發免

定價金六錢

京都府平民

編輯者 平井義直

上京區第六組蛸薬師町十一番戸

京都府平民

出版人 杉本甚助

下京區第五組辨慶石町六十番地

小學新撰修身書

安原時太郎 閱
平井義直 編纂

三

176
2
50

大日本教育會館		
一	一	一
四	五	八
五	架	函
號		
册		

東
所
一

K110.1
181
3